

関東編

長久保赤水誕生地の碑と長久保赤水 旧宅、長久保赤水の墓

(長久保赤水誕生地の碑：茨城県高萩市大字赤浜 774)

(長久保赤水旧宅：茨城県高萩市大字赤浜 3)

(長久保赤水の墓：茨城県高萩市大字赤浜 955-1 先)



長久保赤水

(「高萩市民俗資料館」パンフレットより)

儒者であり、地理学者であった長久保赤水（ながくぼせきすい 1717-1801）は、この地で生まれ育った。

通称を源五兵衛といい、8歳で母を、10歳で父を失ったが、義母の真摯な養育により、自由な勉学の機会を得ることができた。成人してからも研鑽に努めた。51歳になって、この間の学業などが認められて、水戸藩に召し抱えられ、60歳のとき藩主の徳川治保公（はるもり）の侍講となった。

日本で初めて緯線が記入された日本地図「改正日本輿地路程全図」を安永8年(1779)62歳の時に作成し、天明5年(1785)には、楕円形の世界図「地球万国全図」を作成するなど多くの地図編纂を手がけたことで知られている。

中でも日本地図は、享保日本図をはじめ多くの資料を基にして作成したもので、縮尺は129万6000分の一で作成されている。経緯線状のものが記入されているが、残念ながら自らの実測値というものではなく、関連資料を参考にしたもので、経線も緯線に対して単に方格線で示されているなど真の意味の経緯度線ではないという。

しかし、それまでの地図と比較して科学的な地図に一步近づいたものとして評価されている。

晩年には、治保公の命を受け「大日本史」の地理志編纂に関係した。そのとき赤水71歳である。さらに、73歳の時には「蝦夷地之図」を作成するなど、生涯を

地図作成に捧げた人であり、忠敬や石黒信由らと同様後半生に開花した地図・測量技術者ともいえる。

旧宅は、国道6号と旧街道が交わる高萩市の北原にあり、旧家を偲ばせる立派な屋門と塀に囲まれ後裔が住まいしている。赤水の墓は、旧宅から旧道を200m程南に進んだ東側松林の中に長久保家の墓地があり、その中央にある。

誕生の碑は、さらに旧道を1kmほど南に進んだ緩い登り坂の途中、西側にあり、生誕270年を記念して昭和63年3月に建立されたものである。



長久保赤水誕生地の碑



長久保赤水旧宅



長久保赤水の墓

間宮林蔵生家と間宮林蔵記念館

(間宮林蔵生家：茨城県つくばみらい市上平柳 64)
(間宮林蔵記念館：茨城県つくばみらい市上平柳 64)



間宮林蔵（「間宮林蔵記念館」パンフレットより）

間宮海峡を発見したことで有名な間宮林蔵（まみやりんぞう 1780-1844）は、常陸国筑波郡上平柳の農家の子として生まれ、14、15 歳まで当地で過ごしたという。

9 歳の時には、村の専称寺にある寺子屋に通い、読み、書き、そろばんを学んだ。



間宮林蔵生家

元の場所から約 50m ほど北東に移設されたという生家は、約 23 坪ほどあり安永年間（1772- 1781）の築ではないかといわれている。天保 15 年病死の後、幕府は林蔵が公儀隠密であったことから彼の書物入れ、柳行李、絵図面入れなどを公納したが、その所在は今もって不明である。

生家に隣接して立てられている記念館では、林蔵の偉業を紹介するビデオが放映されていて、これは子供向けの楽しい内容である。その他、「北蝦夷島地図」、

「東韃地方紀行」、「蝦夷全図」（いずれも複製品）、そして間宮家所蔵の林蔵が使用した毛布や探検用頭巾などが展示されており、館と生家は 7 代目にあたる間宮雅章さんによって守られている。（→（伊奈）間宮林蔵の墓、→間宮林蔵蕪崇の墓）

筑波山立身窟

(茨城県つくば市筑波 筑波山男体山)

林蔵 12 歳の時、この岩かげで夜通し出世祈願をしたといわれる。筑波山男体山頂を 5 分ほど下ったところに立身窟はあり、その岩影に、1934 年に子孫の手で記念碑が建てられた。



筑波山立身窟（つくば市パンフレットより）

間宮倫宗先生発祥地碑

(茨城県取手市岡4先 小貝川岡堰ほとり)



間宮倫宗先生発祥地碑と銅像

15歳ごろまで上平柳で過ごした林蔵少年は、自宅近くを流れる小貝川の堰止め、堰切り工事などに興味を示し、終日堰の傍らに立ち、熱心に工事を見守っているうちに、幕府普請役の目にとまり江戸へ向かったという逸話が残されている。

江戸に出た林蔵は、村上島之允の下で働くようになり、彼について関東各地をめぐり、蝦夷地の調査・測量にも同行した。

師の村上は、伊勢の人で、地理・測量に優れ、書画も巧みであり、普請役として林蔵を供に関東各地をめぐり、蝦夷地の調査・測量にも従事した。これが、林蔵が蝦夷地探検のほか、日本各地の調査を行うきっかけとなった。

このいわれを記念して、当時堰止め工事が行われていた、小貝川岡堰のほとりに碑が建立された。岡堰は、今でも当地の灌漑や治水に重要な役割を果たしている。平成元年には、林蔵の立像も建てられた。(→間宮林蔵記念館)

村上島之允

伊勢の人、幕府役人、間宮林蔵の師。「蝦夷島奇観」、「蝦夷地名考」などの著者。

村上は、測量家で林蔵の師でもあった。伊勢国宇治山田に生まれ、地理に詳しく、画も巧みであった。天明8年(1788)松平定信に見出されて、幕吏として各地をめぐり土木工事、絵図の作成に当たっていた。

後に間宮林蔵とともに関東各地や蝦夷地を巡り、彼に地理・測量の指導をしたと思われる。

寛政10年(1798)から文化3年(1806)まで、普請役御雇いとして近藤重蔵らと蝦夷地を踏査、植林・農耕を指導し地図を作成し、初期の北海道開拓に尽くした。1807年の大目付中川忠英の巡察に普請役となって随行して蝦夷地を訪ねたのが最後の旅であった。

著書には、「蝦夷島奇観」、「蝦夷見聞記」、「蝦夷地名考」などがあり、アイヌの習俗などを忠実に紹介している。文化5年(1808)に48歳で亡くなった。

墓碑は、台東区谷中1丁目の玉林寺に秦憶丸(ここには、「はたあおきまる」とあるが、「あわきまる」か?)君墓とある。法名は無庵建了居士である。

村上貞助(1780-1846)は島之允の養子で、林蔵を助け「東燧地方紀行」などを編纂したといわれる。北海道大学の北方資料室には、父子の手による色鮮やかな著作が展示されている。(→北海道大学付属図書館北方資料室)



村上島之允の墓

林蔵のお土産

(つくばみらい市)

伊奈町の菓子舗「青柳」では、林蔵最中など林蔵にちなんだお菓子が売られている。



青柳

(伊奈) 間宮林蔵の墓と伊奈の瑩域顕彰記念碑

(〈伊奈〉間宮林蔵の墓：茨城県つくばみらい市上平柳5 専称寺)

(伊奈の瑩域顕彰記念碑：茨城県つくばみらい市上平柳5 専称寺)

1828年シーボルト事件が起きた。

事件の端緒は林蔵に発したといわれているが、彼に何らやましいことはなく、真摯に、公明に対処したにすぎない。しかし、そのために一部のの人に敬遠され、その後は公儀隠密といった仕事をして日本各地を巡る淋しい晩年を送った。

高橋景保の獄死の後、林蔵は親友に次のように語ったという。「我死せば日頃秘蔵せる地図も洋人の為に齊(もた)らし去らる恐れあり。臨終の時にはこれを焚き棄つべし」と。

天保15年(1844)江戸で没し、荼毘にふされた。遺骨は、子供のころ学び遊んだ専称寺に葬られ、威徳院魏誉光念神佑大居士という法名を贈られた。

あの言葉のように、死後に林蔵所有の品々は公儀に没収されたという。

墓石は門をくぐった左手の、当時は小貝川が見渡せたであろう高まりにあり、前部には、明治43年(1910)に建立された林蔵の功績を刻んだ記念碑がある。その後にはひっそりと二つの質素な墓が並んでおり、左は林蔵直筆といわれる「間宮林蔵墓」と、右手には両親の墓がある。

「……其後は天文地理の書を読み、固より妻子も無く、家には甲冑一領、着替え一領、外には当用の武具と兵書なりと有りて、軽賤の者にはまれなる志のある者なり、又御勘定奉行の密使を承て所々の御用を勤めしかば、在宅することも少なく、ただ一人傭婆ありて留守をなす」、平戸藩主松浦静山(1760-1841)が「甲子夜話」で、このように書き留めているように、林蔵が正式に結婚したという記録は無いが、不思議なことに林蔵の墓の右面には林誉妙慶信女、左には養誉善生信女の二人の女性の戒名が刻まれている。

いまでは、風化が激しく読み取りにくい状態である。前者は専称寺の過去帳にも記載があるが、後者はないという。晩年に内妻となった「りき」、第二回探検の後に連れ帰ったアイヌの娘、あるいはその娘ではないかと諸説あるが確証はない。(→間宮林蔵蕪崇の墓)



間宮林蔵の墓



伊奈の瑩域顕彰記念碑

(茨城県つくば市北郷1 029-864-1111)



地図と測量の科学館と地球ひろば

地図と測量の科学館は、国土地理院本院に併設された日本で最初の地図と測量に係る展示施設で、1996年6月1日にオープンした。

館全体の建築延べ面積は5,464㎡で、大きく「展示館」、「情報サービス館」、「地球ひろば」に分かれる。

「展示館」(4,252㎡)には、「常設展示室」、「特別展示室」、「地図のギャラリー」、「オリエンテーションルーム」が配置されている。

常設展示は、「地球に向かう」、「情報に向かう」、「暮らしに向かう」のテーマのもとで地図と測量が、パネルやコンピュータグラフィックなどで分かりやすく紹介されており、企画展示も随時実施されている。

地図のギャラリーでは、国土地理院の地図が紹介され、オリエンテーションルームでは国土地理院の紹介ビデオや子供向けビデオなどが上映されている。

「地球ひろば」は、セラミックに焼き付けられた20万分の1地勢図が作る地球で、その上を歩き、眺めることのできる野外公園である。

情報サービス館では、国土地理院が持つ14万点の基準点成果、旧版地図を含めた6万点の地図、90万カットの空中写真などの膨大な情報提供が受けられるほか、関連図書やアトラスなどの閲覧もできる(1996年現在)。

このように「地図と測量の科学館」は、大人と子供が一緒に楽しめる、学習できる施設である。

測量関係機関の歴史は古く、明治2年(1869)に民部省に地理司戸籍地図掛が、あるいは明治4年に兵部省に間諜隊が設置されたことに始まる。

しかし、明治初期は役所の統廃合が多く、その役割も不明確で、工部省、開拓使、大蔵省などで、それぞれ別個に各省の事業に関連する測量が行われた。

陸軍関係のことは、兵部省間諜隊ののち、陸軍省間諜隊、同参謀局測量課、参謀本部測量局などを経て、明治21年(1888)に参謀本部に陸地測量部が組織されると、地籍測量を除く全ての陸部の測量を同部が担当し、以後地理調査所を経て国土地理院と続く。

当初は地図作成とそのための測地測量を主に事業を進め、作成された地形図は、参謀本部の、あるいは陸測の5万分の1として親しまれてきた。

国土地理院は、測量行政、測量事業、研究開発、国際協力の4つを柱に、従来の測量に加え地震予知、防災、環境保全などのための測地測量と人工衛星を利用したGPS測量やコンピュータによる地図作成など、新技術の下で幅広い業務を進めている。

農政学者長島尉信の墓

(茨城県つくば市小田 3, 048 延寿院)



長島尉信の墓

長島尉信（ながしまやすのぶ 1781-1867）は、農民の苦難と不平等を土地制度、特に適正な検地の実施によって改革しようとした人である。今風にいえば、地籍測量の実施に生涯をかけた農政学者である。

尉信は、天明元年茨城県筑波郡小田村（現つくば市小田）の小泉吉則の長男として生まれ、幼名を吉弥といい、後に尉信と改め、隠居後は郁子園（むべその）と号した。

享和元年（1801）長島家の養子となり、文化 5 年（1808）27 歳の時小田村の名主職を継いだ。

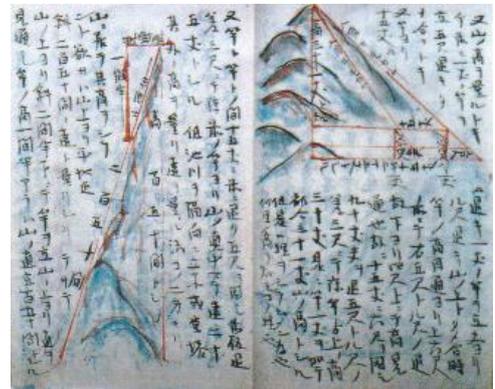
彼は当時の名主の職務であった、検地帳・宗門改人別帳などの保管、年貢の完納、領主の命令の遵守、村の維持などに領主と村人の間に入って、苦労を重ねながら農村改革を目指していた。

文政 4 年（1821）秋の課税の下見調査に端を発した紛争と、文政 6 年の田畑の境界紛争の解決に農民の立場に立ってこれらに当たったが、かえって農民の反発を受け、土地紛争の難しさを知り、文政 8 年（1825）44 歳にして、長男尉敏に名主職を譲り隠居した。

これを機に江戸に出て、算学者の普門律師について天文、暦学、算学、測量などを学んだ。これより先彼は、土地制度の変遷や租税法の改革、これに関連して検地・測量についても研究を重ね、併せて毎日 1 万字の書写を課し、その成果は 15 年間に 15 箱にもなったという。

天保 9 年（1838）には、土地制度などの最初の成果「田芹」を著したことで、翌年水戸藩に認められ、招かれ「御土地方御郡方勤」として領内の検地にあたっ

た。この時水戸藩は、検地事業推進のため、新たに検地局を設置した。その後天保 14 年には土浦藩に新たに設けられた「地方掛」（土木測量掛）として招かれ、測量術を生かしての土浦城郭の修復や検地を精力的に行ったが、その待遇は芳しくなく、尉信には不満があったという。この時の城郭修復に際して、正確な測量によって作成されたのが「末広御備御本丸二三丸分間歩詰図」（土浦市立博物館蔵）である。



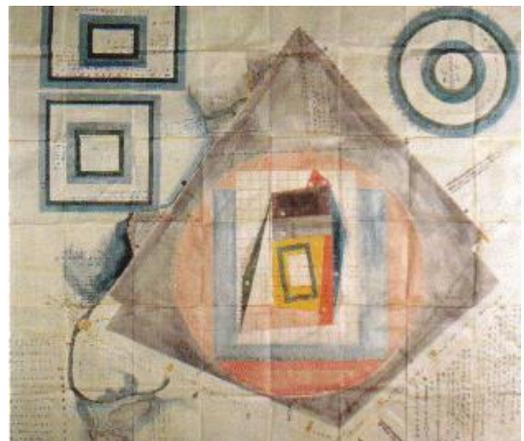
「量地雑方」

（茨城県立歴史館特別展「長島尉信とその時代」図録より）

彼の交友関係は広く、全国におよんでいる。

嘉永 2 年（1849）土浦にあった尉信を、松浦武四郎（1780-1844）が訪問して 10 日ほど滞在したといい、その時尉信は、松浦について次のように綴っている。

「身は小なる人に候ども、さてさて胆大きき人にござ候。当年三十一歳と申し候。間宮（林蔵）・最上（徳内）両氏が上にゆくゆくは出申すべくやと頼もしき人にござ候。……」



「末広御備御本丸二三丸分間歩詰図」

（茨城県立歴史館特別展「長島尉信とその時代」図録より）

「傘式地球儀」(土浦市立博物館展示)で有名な、沼尻墨僊(1775-1856)は尉信の母方の一族で、尉信について暦法を学び勉学に励み、寛政12年(1800)に地球儀を完成した。

尉信の学問は、農民の生活を改善するための改革、それは検地を正し、土地の生産力に応じた適正な年貢とすることで、農村の荒廃を防ぐという思想を中心とする農政学であった。

主な著作としては、「田芹」のほか、田畑の測量、山の高さ、河の勾配などの測り方を図入りで説明した「量地雑方」、「むべ園雑集」などがある。著作の多くは茨城県立歴史館、土浦市立博物館が所蔵している。墓碑は筑波山を望む旧小田村の延寿院(現つくば市小田の小田中部公民館前)にある。(→傘式地球儀を作った沼尻墨僊の墓)

古河歴史博物館

(鷹見泉石コレクション所蔵)

(茨城県古河市中央町 3-10-56 0280-22-5211)
(墓碑：古河市横山町 3-6-49 正麟寺)



鷹見泉石肖像

(古河歴史博物館パンフレットより)

古河歴史博物館は、十代古河藩主土井利厚と十一代藩主土井利位(としつら)に仕えた鷹見泉石(たかみせんせき 1785-1858)が収集した洋学資料、日記のほか多数の地理・地図資料を展示している。

貴重な多くの資料を収集した鷹見泉石は、天明5年古河藩の鷹見忠徳の子として生まれ、名を鷹見左衛門忠常といい、隠居してから泉石と号したことから、この名で呼ばれる。

彼は11歳にして江戸藩邸に上り、藩主利厚に近侍した。14歳から大小姓となり、まもなく藩主の小納戸格取次という秘書としての職務についた。当時藩主は、現在の外務・防衛大臣にあたる海防掛老中にあつたことから、泉石自身も西欧諸国の接近に伴う難事件の処理にあつた。特にこの時期は、北方問題が重要案件になっていることもあり、この解決にあつると同時に、北方・蝦夷関係及び洋学・蘭学に接する機会にも恵まれた。

彼の収集した資料は、約9,000点以上にも及びその範囲は、語学、地図、地理、天文、物理、測量、兵学、絵画など広範囲に及んでいると同時に、単に趣味としての収集だけではなく、職務上の知識向上、問題解決のために入手につとめたものが大部分である。

特に、地図・地理書の類は1,000点を越える。もっとも彼は、若年の頃から地図に興味を持ったようで、コレクションには小姓時代に写したと思われる地図も見受けられる。

収集した地図の多くは自らの手による写図の類であるが、古河藩の村絵図、江戸の地図、その他の国絵図のほか、一般に刊行された日本全図や世界全図など広

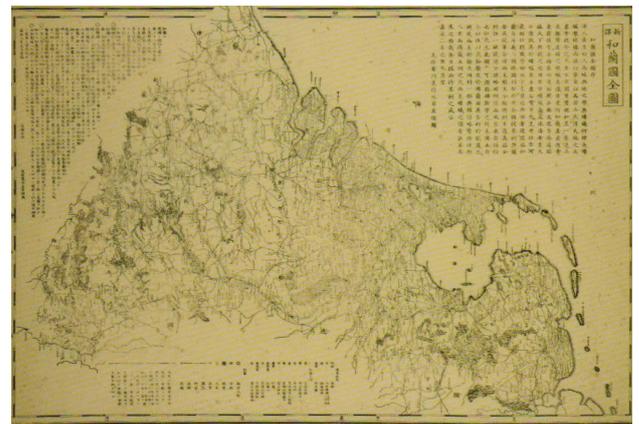
範囲に及んでいる。

この中には、近藤重蔵作の「蝦夷全図」の写し、間宮林蔵作「北蝦夷地全図」の写し、伊能忠敬作「大日本沿海輿地全図」小図の東図1枚の写し、ロシア使節レザノフが長崎奉行に贈った「ロシア帝国全図」の写しほか、本初子午線を金華山とする作者不詳の円筒図法の珍しい世界図「新製総界全覽方図」などが含まれている。

また、オランダにおける城砦の間隔一覧表を参考にして作成したと思われる「日光駅路里数之表」(1823年)と、古河に隠居してから作成した詳細なオランダの地図「新訳和蘭国全図」(1850年)は、彼の地理学的業績である。



鷹見泉石の墓



新訳「和蘭国全図」

(古河歴史博物館絵はがきより)

収集あるいは作成された地図類は、古河歴史博物館に展示されており、一部は絵はがきとして販売されている。

ここでは、主に泉石と地図収集について紹介したが、彼は洋学知識のほか、蘭学・中国・ロシア語も解し、行政能力にも優れた開明学者であった。

博物館前には、泉石が隠居後に過ごした武家屋敷が「鷹見泉石記念館」として保存されているなど付近には楽しい散策道がある。安政5年(1857)に死去した泉石の墓は、古河市横山町の正麟寺にある。

傘式地球儀を作った沼尻墨僊の墓

(墓碑：茨城県土浦市大手町 8-11 先 華蔵院)

(土浦市立博物館：土浦市中央町 1-5-18

029-824-2928)



沼尻墨僊の墓

土浦の人沼尻墨僊(1775-1856)の目は、鎖国にあっても世界に向けられ、地理学を研究し、「地理書」を著し、世界地図の模写につとめ、傘式の地球儀を考案・作成したことで知られている。

墨僊は、幼名を常治といい土浦の旧家五香屋(中村姓)の9番目の子として生まれた。すぐに町医であった沼尻家の養子となった。養父は病気がちであったことから、若くして仕立て商売に精を出し、養父母の孝行につとめた。

幼少より向学心が旺盛で、勉学にも精を出していたが、いつのころからか地理学に興味を持ち始め研究書などを著したが、だれに師事しこれを修めたかは明らかでない。

25歳の年(1800)には、世界各地について地誌的記述をした地理学研究の書、「地球万国図説」を著した。ここでは、地球儀の製作をしたこと、それを寺子屋教育で使用したことについても記述されている。

続いて、当時の地理書を数多く筆写しており、この中には世界図の模写も含まれている。同時に、多くの地図の収集も手がけており、一部は模写も行っている。片田舎土浦にいて、どのようにして世界の地理書を手に入れたのだろうか。

模写された地図は、長久保赤水作を底とする「地球万国山海輿地路程全図」、「大清広輿図」、同じく高橋景保の「新訂万国全図」などである。

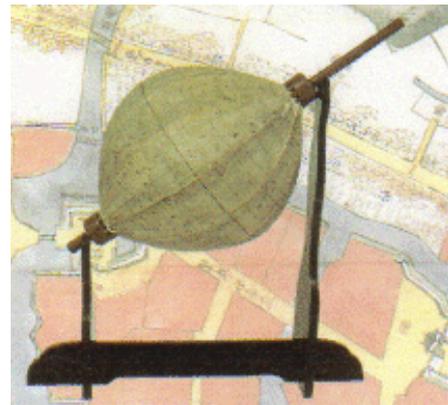
傘式地球儀であるが、現在残されているのは、安政 2

年(1855)に製作されたもので、墨僊の血をひく本間家が所蔵し、土浦市博物館に展示されている。同地球儀は、12本の骨と長さが40センチメートルほどの柄を持つもので、傘を開くように片方を押し上げると地図が開く仕掛けになっている。

作製された地球儀は、同好の士に頒布されたほか、江戸や大阪にも送られ、諸侯にも届けられ好評であったという。それを裏付けるように、各地に発送した「手控え」が残されており、地球儀も神戸市立博物館と山口県防府市の毛利博物館に保管されている。

前出の「地球万国図説」にも記述されているように、墨僊はこの地球儀やこれも彼が編纂した教科書「土浦名所案内」などを使って、主宰する寺子屋「天章堂」で土浦周辺からやってきた多くの子弟を前に、熱心に書と地球、地理について教えた。

この時期の他の科学者と同様、彼もまた多才であった。こうした地図作成、地理学研究のほか、彗星を含む天体観測、天文機器の製作などの天文学についての研究、寺子屋による庶民の子弟教育、水利土木技術を使った土浦市街地での井戸掘りにも力を発揮した。当然のように書や絵画もたしなみ、市内の各所に書画が残されている。



傘式地球儀(大輿地球儀)

(土浦市立博物館パンフレットより)

彼の性格などについて知るものはないが、養父への孝養によって土浦藩から二度の褒賞を受け(1802、1814)、後にも寺小屋教育の功績によって御給米を受け(1837)、さらに帯刀を許される(1844)などを見れば、真面目な地理学者であり、生徒に慕われる真摯な教育者であったに違いない。

安政3年(1856)81歳でこの世を去った墨僊の墓は、土浦市大手町の華蔵院(不動尊)にひっそりと建っている。また、文久2年(1862)には門人の手によって、

退筆塚が中城町琴平神社（現土浦市中央町）に建てられた。

最後に、地球儀への墨遷の思い入れを聞いてみよう。
「私は若い頃地球儀を作り、長い間持っていた、近頃しきりに、銅版で印刷して同好の士に分けないかと勧める者がいて、八十の年寄りであるが、昔からの地図を描きたいという癖が亦々頭をもたげ、……早々にできあがった。多くの世界地図愛好家に見て頂きたく、永く子孫にも残したと思うものである。願わくはこの仕事が、ボケ老人一世一代の快挙であるとともに、後世へのよい贈り物とならんことを」（「沼尻墨遷」青木光行ほか著）

傘式地球儀が展示されている土浦市立博物館は、土浦藩士で蘭学者であった山村才助が所蔵していた「坤輿万国全図」も所蔵している。（長島尉信の墓→長久保赤水誕生の地碑・旧宅・墓）

世界地理研究の先駆者山村才助の
贈位紀恩之碑

(贈位紀恩之碑：土浦市大手町 亀城公園内)
(墓碑：東京都府中市多磨町 4-1 都立多磨霊園 6 区
2 種 12 側 9 番)



「山村才助贈位紀恩之碑」

土浦市の亀城公園の一角には、江戸時代の世界地理研究の先駆者であった、山村才助の贈位を記念する「山村才助贈位紀恩之碑」がある。同碑は、曾孫山村慶二の手により大正 9 年 10 月に建立されたものである。

山村才助(やまむらさいすけ 1770-1807) は、本名を昌永といい、明和 7 年に土浦藩士山村司の長男として生まれた。

彼自身の言によれば、幼い頃から学問が好きで地理書を好んで読んだといわれ、特に新井白石の「采覧異言」などに親しんだという。

寛政元年(1789)、19 歳の時に蘭学者大槻玄沢の蘭学塾芝蘭堂に入門し、本格的に世界地理の研究の道に入った。

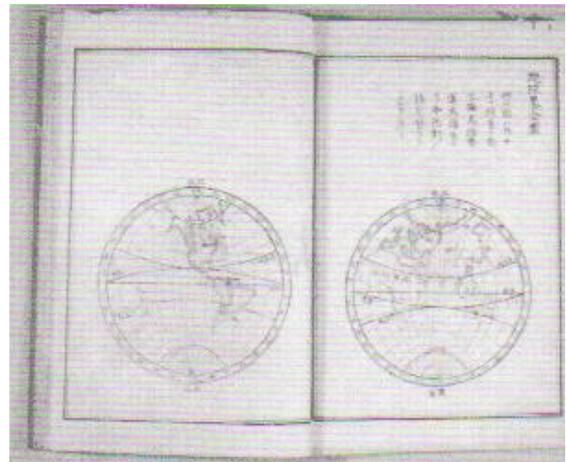
主な功績としては、外国の珍談奇聞をまとめた「西洋雑記」の刊行、前出の新井白石の手になる地理書「采覧異言」を増補訂正した「訂正増訳采覧異言」(1802)の編纂があげられる。同書は増補訂正といっても、その分量は原本の十倍にもなるもので、江戸時代における我が国地理書の最高峰と称せられている。のちに幕府に献上され、これによって才助の功績が認められ、幕命を受け「魯西亜国志」をまとめた。

その他の著述としてドイツ地理書の抄訳「印度志」、「亜細亜諸島志」などがある。その結果、当時作成さ

れた「蘭学者番付」では、西の関脇という高い地位を与えられている。



「訂正増訳采覧異言」表紙
(「山村才助と蘭学の時代図録」横浜市立大学図書館より)



「訂正増訳采覧異言」
(「山村才助と蘭学の時代図録」横浜市立大学図書館より)



山村才助の墓碑

このように輝かしい功績の影で、彼の私生活は褒められたものではなかったようで、幼子を残して妻に逃げられるなど家庭人としては失格、蘭学者との付き合いにも、辛らつな批判による悪評と芳しくない素行がいくつか残されている。

残念なことに、江戸時代における世界地理研究の先駆的役割を担った才助は、37歳の若さで生涯を終えた。向かって左面に「俗名 山村才助」と刻まれた墓碑は、府中市の多磨霊園 6区2種12側9番にある。

那須基線

(北端点：栃木県那須塩原市千本松 768 畜産草地研究所 指定史跡)

(南端点：栃木県大田原市実取 889-23 渡辺宅先)



那須基線北端点

明治8年(1875)、内務省地理寮は「関八州大三角測量」のための基線場を那須野原に選定した。この測量は、英人測量長マクヴィーン(C. A. Mcvean 1838-1912)などの指導により実施された本州初の基線測量という意味の他に、二つの特徴がある。

一つは、開拓使によってアメリカから購入され勇払基線測量に使用され、その後、内務省地理寮、地理局、陸地測量部と移管され、使用されるという特異な運命をたどった「ヒルガード4米測桿」が使用されたこと。

二つ目は基線端点の標高を求めるために東京・塩釜間の水準測量を実施したが、それは、本格的な水準測量の最初であったこと。そこでは、灯籠の台石などに英式の「不」記号を彫刻した水準点で知られる、いわゆる几号が用いられたことである。

基線測量は、のちに現在の日本経緯度原点の基となるチットマン点の経度測定に従事した三浦清俊の担当で、明治11年の4月から6月の間に実施され、10628.310589mの結果を得た。基線長が約10kmと長かった理由は、当時は基線の増大という技術が無く、基線そのものを三角網の一辺としたためである。

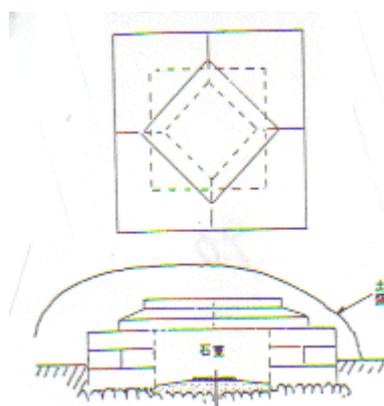
これほどの長距離であることから、その後「エーデルン式25米基線尺」を使用したところに比べると、測定回数だけでも格段の苦勞があったことは容易に想像される。

北端点は、昭和16年(1941)草地試験場の前身が開設されたとき発掘されたのち、旧態に復元し整備され、現独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構 畜産草地研究所正門左側に保存されている。

南端点は、昭和43年に西那須野町の品川弥三氏の手で発掘され、その時から上蓋の石板はずれて散乱していたという。

私の調査時(1996)も生い茂った雑草の中に無惨に散乱しており、図のような構造はうかがい知れないものであった。うれしいことに、その後大田原市の手で史跡として復元され、現在では大切に保存されている。

この付近での東京・塩釜間水準測量に伴う几号水準点は、北端点水準標のほか、大田原上町金灯籠台石(現大田原市中央1丁目1)など数点が確認されている。(→開拓使測量勇払基線→几号高低測量)



基線端点の構造

(「那須基線紀要」西那須野町郷土資料館紀要第2号より)



北端点にある几号水準点

温泉記号発祥の碑

(群馬県安中市磯部 1-12-21 赤城神社)



温泉記号発祥の地碑

地図の上で(地図)記号が使用されたのは、いつの頃が最初であるかは明らかでない。本書、四国・中国・九州編の有馬喜惣太の「防長土図」(1767年)には、集落、寺院、神社のほか国境、村境などの地図記号が決められ、使用されている。また、近畿編にある北浦定政の「平城宮大内裏跡坪割図」(1861年ごろ)には、鳥居や井戸の地図記号が使用されている。

一定の決まりのもとで、本格的に地図に記号が使用されるのは、国の機関が組織的に地図作成を始める明治期に入ってからのものである。

国土地理院とその前身が作成した「地形図」には、多くの地図記号が使用されており、地図作成に関連する文字や記号についての規則「2万5千分の1地形図図式」には、1996年現在でも120個強の地図記号が使われている。

地図記号は、縮尺化された地図の上に、できるだけ多くの情報を分かりやすく表現するために工夫されたもので、対象物の上面や側面からの図形や、対象物が連想できるものをシンボル化して決められている。

さて、温泉の地図記号は、ご存じのように湯壺から沸き上がる湯けむりを連想させるものであるが、幾つの変遷を経て、現在の記号になっている。現記号は昔のものに比べ、湯けむりの微妙なゆらぎも、湯煙の次第に消えていく様も感じられないが、これは、時代が職人芸から大量生産へと変わったことと無関係ではない。昭和30年代が境目である。

この傾向は全ての地図記号にいえらることで、他の地図記号についても比較してみると良く分かる。

温泉記号は、逆さクラゲと称されるが、地図記号として、同時にあやしげなホテルのマークとして盛んに

使用されたこともあり、その時に温泉協会が新たなシンボルマークを制定したといういきさつもある。

群馬県の磯部温泉には、温泉記号発祥の碑がある。これは昭和56年に建てられたもので、昭和45年ごろ発見された入会権紛争に関する古文書の裏にあった裁許絵図に、温泉記号が描かれていたことによる。同図は長さ1.5m、幅2mもある手書きのもので地図には、万治4年(1661)と記されており、泉源に記された温泉記号は、日本最古ということになる。(→北浦定政の墓→山口県立博物館)



絵図に描かれた温泉記号
(安中市観光協会パンフレットより)

利根川水源碑

(群馬県利根郡みなかみ町藤原)

利根川は、古くは刀禰川と書かれ、板東太郎とも呼ばれ、総延長 322 km で信濃川に次いで日本第二位、流域面積は約 16,840 km² で日本一の河川である。

ちなみに板東太郎につづく「川の三兄弟」は、九州の筑紫次郎（筑後川）と四国三郎（吉野川）である。

利根川の水源の位置は、三国山系の大水上山（1834 m）の南斜面にある。水源碑は、同山から丹後山へ続く南西の尾根を約 500 m ほど進んだ尾根上にあり、これより下ること約 200 m の位置が水源であるが、ここは通年雪渓が存在することが多いという。

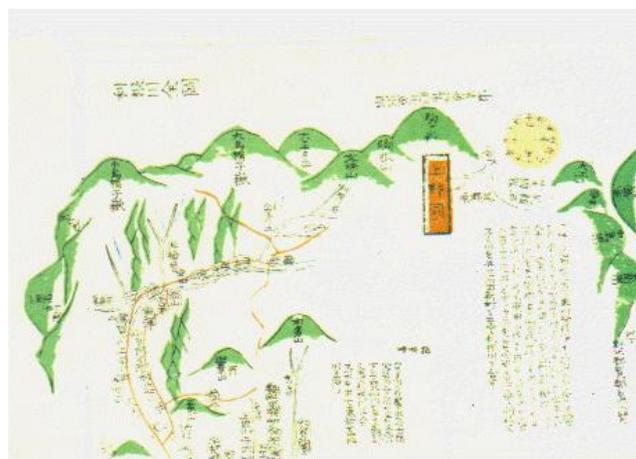
山名は源流を意味する「みなかみ」からつけられている。



利根川水源碑
(国土地理院関東地方測量部提供)

利根川の源流部は、険しく、滝が多いため容易に明らかにならなかった。有名な赤松宗旦著の「利根川図誌」には、『利根川の源は、上野国の利根郡の藤原の奥、文殊山の中である。』とあり、近くに文殊菩薩の岩がありここからの湧水を水源としているとある。文殊山という名は現在の地図には見られないが、「利根川図誌」にある地図や、「上野絵図（1690年頃）」に記入されている位置からすると、現在のススケ峰（1,959m）付近と思われる。

利根水源の第一次探検は、明治 27 年 9 月の「群馬県水源国境探検隊」で、隊長は警察官でピストルと日本刀を持参して万が一に備えたという話もある。しかし、その当時は正確な地図もなく、調査は困難をきわめ、目標とした大刀根岳（大水上山）に達しなかったという。



「利根川全図」
(赤松宗旦著「利根川図誌」より)

大正 15 年 8 月の群馬県農務課を主体とする利根水源探検隊が水源を目指し、大水上山に登頂し、この山のふところを源流と確定したというが水源の発見には至らなかった。

太平洋戦争も終わった昭和 29 年、このころになると人々の生活にも余裕ができて、水源確定の機運が高まった。8 月、再度「利根水源調査登山隊」が組織され、マスコミが同行した大がかりな調査によって、大水上山の源流の遡行に成功した。

その後、利根川治水 100 年の記念事業として、昭和 63 年（1988）に建設省と群馬県は、国土地理院の協力を得て水源位置を確定し、これに近い尾根に「利根川水源碑」を建て、地形図にもこれを記入した。

井澤弥惣兵衛頌徳碑

(井澤弥惣兵衛頌徳碑 さいたま市見沼区片柳 1843
万年寺)

(井澤弥惣兵衛の見沼通船堀 さいたま市緑区大字大
間木・下山口新田 国指定史跡)

(井澤弥惣兵衛の墓 埼玉県南埼玉郡白岡町柴山
1099 常福寺)

井澤弥惣兵衛(1654?–1738)は、見沼代用水の開削
や手賀沼の新田開発で知られた治水家である。

紀伊国那賀郡(現海南市)の豪農の家に生まれ、徳
川光貞に見いだされて勘定方となった。その後、紀州
藩主徳川吉宗の命を受けて紀ノ川流域の新田開発を手
がける。

徳川吉宗が8代将軍として江戸城に入り、財政立て
直しのために新田開発を奨励するに及んで、紀州藩士
から幕臣となっていた井澤弥惣兵衛に、見沼代用水の
開削及び周辺地域の干拓を命じる。井澤は、1728(享
保13)年に、見沼代用水事業に着手する。

同事業は、利根川から引水する幹線だけでも約80km、
さらに多数の分流路からなる見沼代用水を開削し、同
時に周辺沼地を干拓農地化するという壮大な計画であ
った。用水路の工事に伴う測量は、水盛りと呼ばれる
水準測量で行われ、1/600の傾斜を持つ水路が計画さ
れた。

また、計画された水路と旧来河川を立体交差させる
場所では「伏越(ふせごし:サイフォンの原理)」、さら
に船の自由航行が必要な個所などでは「懸樋(かけ
ひ)」が使用され、そこでは「紀州流」と呼ばれる優
れた土木工事と測量技術が力を発揮した。

こうした技術は、同時期に紀ノ川小田井用水工事で
活躍した、大畑才蔵(1642–1720)に通じるものである。

井澤の工事成果の一つである見沼通船堀は、享保16
年(1731)に完成した日本最古の閘門(こうもん)式
運河である。

これは、パナマ運河と同形式のもの、見沼代用水と
芝川との3mの水位差を、木製の閘(閘門)により水
位を調節し船を通すもので、東縁と西縁にそれぞれ2
基ずつの閘門を設けることで水位を調節しながら船の
航行を容易にしている。

その後の井澤弥惣兵衛は、多摩川改修、手賀沼の
新田開発、木曾三川改修計画などにあたり、1731(享
保20)年には、美濃国郡代に就任した。

現白岡町の常福寺には分骨を受けた墓が、さいたま
市見沼区の万年寺には、井澤弥惣兵衛の用水工事など

によって、恩恵を受けた農民諸氏が後に建立した頌徳
碑が残されている。



見沼通船堀

リンドの水準原標

(千葉県銚子市飯沼 293-1 飯沼観音境内 市指定史跡)



飯沼観音境内の水準原標

明治 5 年 (1872) に内務省に招かれて、日本に来たオランダ人リンド (Isaac Anne Lindo 1848-1941) は、他のオランダ人の招聘者と同様、河川、港湾、灌漑などの分野の土木技師である。

功績の第一は、当時たびたび洪水に見舞われていた、信濃川下流域の被害を防ぐため計画されていた分水路計画に対して、科学的な見地から「大河津分水調査」報告としてまとめたことである。

この報告では、分水計画を実施すれば、信濃川の水深に影響を与え、新潟港に影響がでることから中止を進言しているという。

二つ目は、日本には河川管理のための基準や水位観測データがないことから、河川工事の計画に必要な量水標を上司のファン・ドールン (Cornelis Johannes Van Doorn 1837-1906) の指揮で現茨城県境町などに設置したことである。これが日本で最初の量水標である。

次いで、銚子市飯沼に河川工事の水準基準面となる水準原標と量水標を設けた (明治 5 年)。これは、日本で最初の水準原標の設置、河川基準面の設定である。リンドは、さらに江戸川河口の堀江 (明治 5 年) と、その後陸地測量部が水準原点の標高決定に使用する荒川河口の霊岸島 (明治 6 年) にも量水標を設置し、銚子の水準原標と関連づけたといわれる。

以後、これらの成果がそれぞれの河川の基準面として、Yedokawa peil (Y. P.) のように呼ばれて河川工事などに使用された。

水準原標は、昭和 12 年 (1937) 6 月に、内務省東京土木出張所の栗原技師が所在を確認したといわれ (昭

和 12 年 6 月 23 日東京朝日新聞)、銚子市中心部の飯沼観音堂の脇、駐車場の境にある。石井研堂著「明治事物起源」に紹介された写真には、史蹟紹介の標識と標石には中心部の凸部も見えるが、現在は標識もなく標石も破損されており、日本で最初の水準原標としては寂しい保存状況である。(→リンドの江戸川原標 測水標石)



昭和 12 年 6 月 23 日付 「朝日新聞」

リンドの江戸川原標（測水標石）

（千葉県浦安市堀江 4-1 清瀧神社境内）

利根川の調査、淀川河口築港計画、野蒜築港、安積
疏水計画などで功績のあったオランダ人ファン・ドール
ン（Cornelis Johannes Van Doorn 1837-1906）と
ともに明治 5 年（1872）にリンド（Isaac Anne Lindo
1848-1941）が来日した。

オランダ人技術者は、その後木曾三川で活躍するデ
レーケ（Johannis de Rijke 1842-1913）、チッセン
（AHTK Thissen ?-?）などが相次いで来日する。

さて、利根川水系の治水事業を担当したリンドは、
来日間もなく利根川の中田（現茨城県古河市中田）、境
町（現茨城県猿島郡境町）、布川（現茨城県利根町）、
石納（現千葉県香取市）、賀村（現茨城県神栖町）、飯
沼（現千葉県銚子市）と江戸川の今上（現千葉県野田
市）、湊新田（現千葉縣市川市）、堀江（現千葉県浦安
市）そして、新利根川の上須田（現茨城県東村）の合
計 10 箇所にて日本で最初の量水標を設けた。

次いで、これらの量水標の観測結果から、銚子市飯
沼観音境内に設置した標石を基点と定め、これを日本
水位尺（Japan Peil:J.P）と名付けた（1872 年）。

この後、飯沼、堀江間の水準測量を実施し、利根川
と江戸川の水位を関連づけた、その結果は、飯沼の水
位に対して、堀江の水位は+1.11(L)高かったという。
この時の単位 L（エル）は、1 尺（30.3cm）である。本
来、L（エル）は、オランダにおける長さの単位で、
同国では、おおむね 69cm である。また、江戸川の各量
水標を経て関宿の量水標までの水準測量も実施した
（明治 5 年、6 年）。

水準測量の実施に際しては、銚子市飯沼観音の原標
と同様の標石を現浦安市堀江と現関宿町に設置した。
この間の水準測量は、後に英人マクヴィーンの指導で
実施した几号水準測量と同様に豪農の屋敷門の礎石や
石灯笼などの構造物を利用した 7 カ所の端点と 16 カ
所の表釘（鋳釘のことか、構造など不明）を経由して
行われた。

彼が作成した利根川に関する地図及び測量野帳は、
残念ながら関東大震災などによって焼失したという。

現浦安市堀江 4 丁目 1 の清瀧神社に現存する標石
は、リンドが明治 6 年に内務省に報告した「日本治水
考」あるいは、「利根川改修沿革考」に「飯沼観音及び
堀江に於いて測水表石（ペトルメルクステトン）を立
て、之を不易の基点と定め做す」と記載されているも
のである。

現在の調査の範囲では、その他の同様の測水標石や
表釘はすべて不明である。この水準測量こそ、日本で
最初の本格的なもので、設置された水準点標石も日本
で最初のものかもしれない。

同書の「江戸川筋各所の基点（ファストピュント）
之位置」を参考までに記載するので、皆さんの手で探
して見ませんか。

そして、日蘭通商 400 年にあたる 2009 年、リンドの
顔のレリーフなどが施された記念碑が、オランダから
贈られ現地に建立された。（→リンドの水準原標→几号
水準測量標石）



清瀧神社一隅にある測水標石



測水標石

番号	記	高さ (L)	地名
1a	江戸川口の水位尺0点	1.11	堀江
21E	黒龍社（ママ）南方の獅子像但し 基石の中標北にて東の角	14.25	同
21E	黒龍社（ママの側に立つる測水表石 但し此の石上に贅する小盤の上面	8.63	同
37a	荒井川の上面に在る表釘	15.11	荒井村
65a	江戸川水位の0点	2.62	湊新田
86a	戸澤氏宅内の社前の東傍の石燈 にて其台石の第二層の即ち中央右上面	15.49	下新宿
97a	堤上枯木の表釘	18.28	河原
131a	市川村の下方凡そ半里の所にて河 濱に在る二助宅の表釘	20.97	市川
154a	根本川の放水樋の表釘	19.93	同
156M	高の台丘上にて總寧寺門前の左柱に 在る（寺に向かい左）表釘	63.16	国分台
221a	つぢはしたきち宅の表釘	23.06	松戸
222a	逆水の放水樋にある表釘	18.40	同
289a	七右衛門新田と外河原村の境にて水 入れ水道に在る表釘	19.46	七右衛門新田
317a	りょうさん寺和尚の門前にて門敷き 右方礎石の即ち新石の全面正中	21.24	流山
318a	履大の茶屋前にて火事見鐘樓の柱に ある表釘	26.77	同
402a	今上より凡そ十丁下り堤上の小さな 庚申塚三個樓の像但し台石北面東 角（地石に非ず）此所に小道あり	22.21	深井新田
411a	江戸川水位尺0点	17.52	今上
412a	今上村に属する洲崎伊右衛門の住す る家の表釘	32.82	同
475a	河崎小路の三の放水樋の表釘	26.63	築比地
516a	小平堤に在る最大庚申塚の北側の西角	43.36	小平
530a	旅籠屋の前面の石柱にある表釘	44.49	西寶珠花
629a	庄内領の水入れ水道に在る表釘	33.81	木津内
666b	中島用水の水入れ水道の表釘	36.34	中島
666a	江戸川水位尺の0点	31.34	同
678a	廃屋前にて門の右柱の表釘		

伊能忠敬出生の地
(伊能忠敬記念公園)

(千葉県山武郡九十九里町小関 854 県指定史跡)



伊能忠敬生誕地碑

伊能忠敬は延享 2 年 (1745) に上総國小関に生まれ、幼名を神保三治郎といった。父神保氏は小関家に婿養子に入ったのであるが、母が病死したため父は小関家を去り、忠敬だけが残った。

少年時代には、寺の僧に数学を学び、医師に仕え経学や医書を学んだといわれるが、17 歳のときに下総国佐原、伊能家の婿養子になり伊能三郎右衛門を名乗った。

忠敬にとっての九十九里は単に生まれ故郷というだけでなく、自ら莫逆の友と呼び忠敬の精神的支えとなった上総地方代官兼干鯛問屋の主、飯高尚寛惣兵衛の郷でもあり、故あって勘当を受けた養子盛右衛門、長女お稲夫婦の住まいした地でもあり、簡単には断ち切ることのできない故郷であった。

少年時代までを過ごした小関家は、明治時代に途絶えたため生家は現存していないが、九十九里町小関集落の一角に、昭和 11 年に建立された徳富蘇峰書の「伊能忠敬先生出生の地」の碑があり、同地に平成 8 年 2 月に生誕 250 年を記念して、象限儀を用いて測量する姿の像などが設置された伊能忠敬記念公園が建設された。(→伊能忠敬記念館及び旧宅)



伊能図 (中図)

(国立国会図書館蔵 武揚堂より)

伊能忠敬記念館及び旧宅

(伊能忠敬記念館：千葉県香取市佐原イ 1,722-1
0478-54-1118)

(旧宅：千葉県香取市佐原イ 1,900 国指定文化財)



伊能忠敬旧宅

17歳のときに伊能家の婿養子に入った伊能忠敬は、酒造りなどの家業に精を出し、家運の挽回に努めた。その結果、持ち合わせた商才と人並みはずれた勤勉さから、次第に家勢も上向きとなった。

明和3年(1766)、天明3年(1783)などに相次いで起きた飢饉に際しては、窮民を救うことに心血を注ぎ、そのことで、地頭から帯刀を許されたという。

49歳のときには、家督を長男景敬に譲り隠居、翌年寛政7年(1795)に江戸深川黒江町に移り住んだ。

旧宅はJR佐原駅の東南、銚子方面へ向かう道筋の小野川にかかる忠敬橋を渡った南側である。付近は往時の面影を残す情緒あふれる場所で、船着き場には、今にも柳の枝越しに江戸に向かう小船が行き交うのが見えそうである。

伊能家は、表の店舗と奥の母屋から成り、母屋は忠敬自身の設計により寛政5年に建てられたが、忠敬は、まもなく江戸に移り住んだのでこの居宅に長くは住んでいない。

小野川をはさんだ向かい側にある記念館には、忠敬が使用した「尺時計」「佩用の刀」のほか、「日本東半分沿海図」などの地図、「量程車」、「象限儀」などの測量機器等のほか、伊能勘解由泊と墨書された「宿泊木札」など千点以上に及ぶ忠敬ゆかりの収蔵品の一部が展示されている。

文政4年(1821)に完成した伊能図は大図214図葉、中図8図葉、小図3図葉があり、幕府に上程されたが、これらの原図は不幸な運命をたどった。「伊能図」は上程された後、公開されず大切に保管され明治政府に引き継がれたが、明治6年に皇居が火災に遭い、伊能図

も灰になった。しかし、伊能家には副が揃っていたので、翌年これを献上した。ところがこれを保管していた東京大学付属図書館が、大正12年の関東大震災で焼失し、伊能図はまたも灰になってしまった。

それでも幸いなことに、伊能図は残っていた。

作成後、測量中に世話になった大名らに贈ったもの、明治政府から借用して模写したものなど60数面である。現在の主な所在場所は、東京国立博物館、成田山仏教図書館、天理大学付属図書館など。中には経緯が明らかでないが、最近になってフランス(イブ・ペイレ氏宅)から発見された例もある。

2001年3月には、米国議会図書館で未確認分の148面を含む207面(内169面が彩色なし)が発見された。残る未確認分は、4面である。この米国議会図書館で発見された伊能大図は、国土地理院の前身である参謀本部陸地測量部の輯製(しゅうせい)20万分1図作成のための骨格的基図として模写されたものと考えられている。



伊能忠敬記念館
(伊能忠敬記念館HPより)

香取市は、「地図のまち佐原」をキャッチフレーズにしている。その名のとおり地図(忠敬)に関連する史跡等が多いが、それ以外にも町中には、「北総の小江戸」と呼ばれるほど多くの情緒あふれる建物が散在し、七月中旬の夏祭りや十月第二週末の諏訪神社の大祭には佐原ばやしの音に送られて山車が繰り出す。

この時期に、それらの建物群と忠敬ゆかりの記念物とを合わせて散策するには絶好の地である。(→伊能忠敬出生の地)

(諏訪公園) 伊能忠敬像

(千葉県香取市佐原イ 771 諏訪公園)



(諏訪公園) 伊能忠敬像

忠敬像は、諏訪神社下の諏訪公園にあり、大正 8 年 (1919) 建立されたもので、杖先方位盤を使用しながら記帳する姿である。

杖先方位盤は、携帯に便利であったことから伊能忠敬の全国測量には最もよく使用されたもので、檜の木で作られた杖の上に円周を 360 等分に目盛り、常に水平を保つように工夫された真鍮製の小方儀 (磁針とアリダートを組み合わせたようなもの) を乗せて方位を測った。

銅像の台石には漢学者塩谷時敏による「仰瞻斗象俯畫山川」(揚げば斗象<北斗>を瞻<見>、俯しては山川を畫<く>)の書が刻まれている、高さ約 8m 強の堂々たるものである。(→伊能忠敬記念館及び旧宅)

(佐原小学校) 伊能忠敬像

(千葉県香取市佐原イ 1, 870 佐原小学校)



(佐原小学校) 伊能忠敬像

忠敬の全国測量は、まさに偉業というものであったから、明治時代には小学校の国語の教科書や少年向けの単行本に取り上げられた。その後、偉大性だけでなく不屈の精神といったものが強調されて、修身の教科書にも登場することになった。

この像は佐原が生んだ偉人として、昭和 42 年に小学校の新築に際して建てられたもので、書を見る忠敬像が、あたかも二宮尊徳像のように、小学校中庭の池の片隅に立っている。(→伊能忠敬記念館及び旧宅)

伊能忠敬先生墓所

(千葉県香取市牧野 1, 752 観福寺)
(千葉県香取郡多古町南中 日本寺)



墓所のある観福寺



伊能忠敬先生墓所

有功院成裕種徳居士の戒名が刻まれた忠敬の墓が、香取市の伊能家の菩提寺観福寺にある。観福寺は、町の南東約 1.3km ほどに位置する、真言宗の巨刹で、関東三大厄除け大師の一つでもある。

忠敬の墓所にふさわしい、静かで趣のある古寺で、忠敬の墓までは案内板があるが、山門から杉の巨木が続く参道を進み、右に本堂を見て左手石段を登った右手奥まった位置に伊能家の墓所がありその正面にある。ここには、文政元年（1818）に江戸八丁堀亀島町の自宅で亡くなった、忠敬の爪と髪が納められているという。

本寺には、他に釈迦如来など四体の重要文化財があるので、お願いして拝観したい。

このほか、東京都台東区東上野 6 丁目源空寺と千葉県多古町・正東山日本寺の平山藤右衛門家墓地内にも忠敬の墓がある。

平山家は、忠敬の父の生家神保家の親類にあたり、忠敬の最初の妻ミチの母の生家でもある。忠敬は伊能家に婿入りする際に平山家の養子となった。(→伊能忠敬の墓)

忠敬お土産

(いずれも千葉県香取市内)

「忠敬漬け」；大川みどり漬け
やぶ北煎茶「忠敬好み」；大高園
「地図サブレ」；菓子のおざわ
清酒「忠敬翁」；山崎屋酒店など



「地図サブレ」

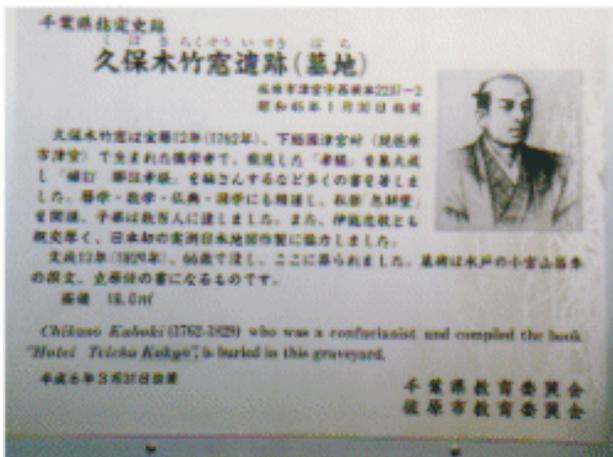
久保木竹窓遺跡と久保木清淵の墓

(久保木竹窓遺跡：香取市津宮 497 県指定史跡)

(久保木清淵の墓：香取市津宮 2, 275-2 先 市指定史跡)



久保木竹窓遺跡



久保木清淵の墓と説明版

久保木清淵（くぼきせいえん 1762-1829）は、当時の佐原村に近い津宮村に生まれ、幼名を新四郎といった。幼くして、香取神宮寺の一つ神宮寺の呑舟上人に学び、長じて数学、暦学、国学などに長け、私塾を開

くなどして、この地の子弟の教育に当たった。親交が厚かった忠敬も、彼から漢学の教えを受けたといわれる。

忠敬の日記などによると、その後の忠敬の全国測量に際して、下図の整理、図上への細字の記入など地図作成に携わり、忠敬の死後も、平山季恭ら他の地図御用所員と協力して「大日本実測全図」の作製を担当し、「大日本沿海実測録」の草稿の作成にも当たった。

忠敬の一連の地図作成への清淵の果たした役割は大きいものがある。

ちなみに、忠敬測量隊が幕府御用であることを知らしめるために持ち歩いた御用旗の文字は清淵の書だという。

史跡は生家のあった香取市の東、津宮の国道 356 号線沿い北側にある。現在も、清淵の号竹窓を連想させる生け垣に囲まれた生家の跡には、子孫が居住しており幾つかの遺品が保存されているという。

墓碑は、清淵のこれまでの控えめな生きざまのように、津宮の南西、JR成田線沿いの丘の中腹にひっそりと建っている。（→伊能忠敬住居跡）

平山季恭

清淵とともに地図作成に当たった平山季恭（1779-1819）は、下総国香取郡中村村に生まれ、幼名を五郎作、長じて郡蔵といった。

祖父季忠は、忠敬が伊能家に養子として入る際に、仮親となった人であることから、郡蔵は幼年の頃から伊能家に入りしており、忠敬に算学を久保木に漢学を学び、忠敬が全国測量に就いた翌年には（1801）測量班に加わった。郡蔵は、困難に直面した時に率先してこれに当たり、一方では昼夜にわたり測量、外業の整理、製図に当たり、いずれの面でも大いに熟達したという。

そのことが、実務には未熟な天文方手附下役などとの不仲の原因となり、文化 3 年（1806）には暇を申し渡され、忠敬のもとを去ることになる。

文化 14 年末、野外の測量は終了したが、病気などで職を解く者が相次いだことなどから製図作業が滞り、忠敬は再び郷里にいた郡蔵を呼び寄せ、姓を平野と仮称して実測全図の作成に従事させた。

文政 2 年（1818）、前年に没した忠敬を追うように郷里で没した。

郡蔵の弟将季もまた、寛政 12 年と享和元年に忠敬に従って蝦夷地と伊豆や奥州の本州東海岸測量に従事した。郡蔵も忠敬の全国測量の隠れた協力者である。

成田山新勝寺の「青銅製地球儀」

(千葉県成田市成田 1-1 成田山新勝寺)



青銅製地球儀

初詣や節分会などで有名な成田山新勝寺の本堂左手石段を上ったところにある、額堂と呼ばれる奉納額や絵馬などを掲げる建築物の中にその青銅製の地球儀はある。

この額堂は、説明板によると文久元年（1861）に建立されたもので、屋根は入母屋椼瓦葺で、重要文化財に指定されている。掲げられた多くの額や絵馬とともに、床面には左から「旧梵鐘」、「勝軍地藏尊」、「方位盤」、「成田屋 七代目市川団十郎の座像」そして、「青銅製地球儀」が鎮座している。

地球儀は、それほど古いものではないが、多くの人の目に触れる、一見場違いな場所にある地球儀ということで紹介する。

この地球儀は、直径 110cm ほどの青銅製で、子午環儀の上に 23,5 度の傾斜をもって設置されていて、明治 40 年（1907）11 月に東京上野の牛肉店の奥平洋三、梅子夫妻が店名の「世界」にちなんで、日露戦争の戦勝記念に奉納したという。

過去には、「日本帝国を銀色にしたるは目立ちて見せんが為なり、これを看る人能く注意して此国を思ひ、彌々将来の発展を図り、益々此色を輝かすことに心掛けられたし」と説明があったという。

作製は、神田岩井町の紀伊国屋伝七が請負、技師は村田鉄之助、鑄工は大島金太郎といわれ、上記のように当時の大日本帝国の範囲に銀の象嵌を施したというが、今では大日本帝国の部分だけが磨耗してその面影はない。

このような神社仏閣への地球儀などの奉納については、安井（洪川）春海が伊勢神宮へ奉獻した天球儀と地球儀が有名である（1691 年ごろ）。この地球儀は、直径 30cm ほどで伊勢神宮付属の徴古館にあり、これも

日本国の部分は金色であるという。

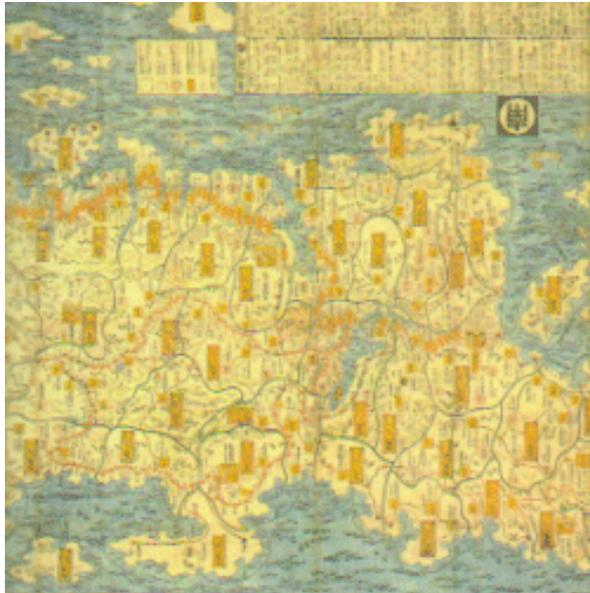
隣にある「方位盤」は、群馬県伊勢崎町佐藤藤三郎奉納とあり、八角形の図形の中に東西南北の文字と震、辰、巽、巳、……といった方位を現す文字と、欄外には辰方向は八日市場、卯方向は銚子といったように各地の地名が記入され、今では観光地などでよく見かけるものだが、いつごろ奉納されたものだろうか。

また、初代の団十郎が成田不動尊を信仰したことで呼ばれる「成田屋」の座像は、地球儀の隣に位置しているせいか、一見忠敬かと思わせる。（→洪川家（景佑）の墓）

国立歴史民俗博物館

(秋岡武次郎コレクション所蔵)

(千葉県佐倉市城内町 117 0434-86-0123)



「流宣図」(部分)

(「日本の古地図」国立歴史博物館図録より)

佐倉市にある国立歴史博物館には、秋岡武次郎氏の収集した古地図コレクション約千点が収蔵されている。

ここに寄贈されたのは、同コレクションの内の日本関係のものと測量書・測量具等である。

同コレクションの主な地図については「日本古地図集成」(鹿島出版会)に紹介されているが、行基型日本図の「集古図所収輿地図」、「正保日本図」、流宣図で総称される石川流宣作の「日本海山潮陸図」、赤水作の「改正日本輿地路程全図」、そして「伊能図」と日本地図史を網羅する幅広いものである。

その一部は、常設展示室の中でも紹介されているが、全てを見ることはできないので、地図関係の企画展示が開催された際に鑑賞したいものである。

また、佐倉市は「洋学のまち佐倉」として親しまれており、藩主堀田正睦・正順が洋学を振興し蘭書の購入や洋学塾の開校を進めたことにより、佐藤泰然、松本良順、山口舜海といった優れた医者と多くの洋学者を生み出した町であり、幾つかのゆかりの地が昔の面影のまま残っている。それらの史跡を含めて訪ねてみると良い。



(「佐倉散策マップ」佐倉市中央公民館より)

石川流宣

(いしかわともものぶ・りゅうせん)

流宣図で知られる石川流宣(1689-1713?)は、本名を俊之といい、菱川師宣の弟子で、浮世絵師で俳人でもあった。「江戸紫」、「江戸図鑑綱目」などの絵本を著した。浮世絵の木版技術を地図作成に利用し、貞享4年(1687)に代表的な「本朝図鑑綱目」を作成した。元禄4年(1691)には、「日本海山潮陸図」を作成した。

同図は絵画的要素が強く、華麗な地図として知られている。相反して図形は粗く不正確であるが、山地、陸路、藩名、宿駅、知行所などのほか潮汐の干満早見盤までついた、当時のユーザーニーズに応えた地図といえる。従って、その後次々と改版し作成され、当時の庶民の旅行や異国への夢を膨らませるものとして、使用されたと思われる。

1708年には、「万国総界図」も作成した。一連の地図は「流宣図」と呼ばれる。

「神奈川県下外国人遊歩規程」標石

(藤沢市藤沢3, 224番地口 立石神社の西)
(小田原市小竹字長作63番イほか)



「神奈川県下外国人遊歩規程」標石

安政年間(5年6月19日)締結の日米修好条約のもとに露英蘭仏と締結した開国条約には、「外国人遊歩規程ハ横浜ノ周囲10里ヲ以テ限リトセリ故ニ相模酒匂川ヲシテ限トス」とあったという。

外国人の酒匂川以西の旅行には許可を必要とするなど、箱根一帯への旅行が制限されていたことになる。当時、このような規定は、下田、長崎、新潟、兵庫、大阪、江戸などにあった。

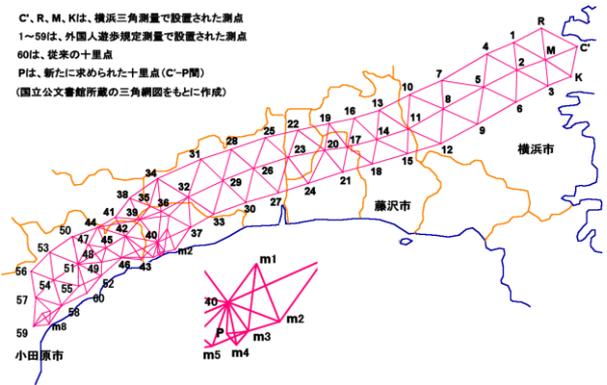
ところで、自由に箱根旅行をしたい外国人は、在日外交官をして、当時の外務卿寺島宗則あてに、「10里地点は正しくない」のではとクレームをつけた。抗議を受けた政府は、朝議の結果、実測して確かめることにし、内務省地理寮がこれを担当することになった。(明治9)

詳しくは、「洋式日本測量野史」(三交会誌)にあるが、測量は、横浜県庁旧旗揚点から旧幕時代の「外国人遊歩規程標札」までの間に三角鎖が組まれ、59の測点と10の補点に埋石が行われ、次いで観測が実施された。結果は、酒匂川の東梅沢付近が新たな10里地点であることが明らかになり、旧標札までは11里27町12間であったことが分かった。異議申し立てには、この測量結果によって反論したといわれる。

箱根温泉を自由に訪れたいものだという外国人のちょっとした要求が、全費用6,034円也(当時と現在の物価を比べて、約1,500倍として換算すると、約1000万円)という経費を要した大測量になったということ。



「神奈川県下外国人遊歩規程」蓋石



「神奈川県下外国人遊歩規程」測量網図

現在、標石の現地での確認のできているもの、あるいは情報として把握しているものは下記のとおりである（「標石で遊ぶ会」調べ）。

- 1号（保土ヶ谷区初音ヶ丘）
- 12号（戸塚区小雀字西井戸）
- 14号（藤沢市石川3丁目）
- 15号（藤沢市立石3丁目）
- 20号（茅ヶ崎市下寺尾）
- 21号（茅ヶ崎市赤羽根）
- 24号（茅ヶ崎市浜之郷）
- 32号（平塚市上吉沢）
- 33号（平塚市万田）
- 34号（平塚市土屋）
- 36号（大磯町黒岩字井窪）
- 39号（小田原市小竹字大台）
- 41号（中井町田中字堀米）
- 42号（小田原市小竹字長作）
- 51号（小田原市鴨宮）
- 52号（小田原市小八幡）
- 53号（小田原市中曾根）
- 54号（小田原市扇町5丁目）
- 56号（小田原市府川字諏訪ノ原）

ただし、1号・20号・21号の標石はつくば市の国土地理院で保管、36号・52号・53号・54号は本来の設置位置よりかなり離れた場所に移設、14号・24号・42号・51号は標石発見の記録があるものの、現在行方しれず、32号・33号は蓋石のみの確認となっている。

おすすめ史跡めぐり（1）

千葉県には香取市、成田市、銚子市、佐倉市周辺などに、史跡などがあるので、ドライブがてらめぐる標準的なコースを紹介する。

○佐原周辺おすすめ史跡めぐり

関東自動車道佐原 IC→①香取神宮→②久保木竹窓遺跡→③久保木清淵の墓→④伊能忠敬記念館及び旧宅→小野川ほとり散策→⑤諏訪公園伊能忠敬像→⑥観福寺（伊能忠敬先生墓所）→大栄 IC

○成田・佐倉周辺おすすめ史跡めぐり

関東自動車道成田 IC→①成田山（青銅地球儀）→②佐倉市・歴史民俗博物館→佐倉市散策（佐藤泰然、順天堂）→関東自動車道佐倉 IC

○銚子周辺おすすめ史跡めぐり

①九十九里町・伊能忠敬出生の地→銚子道路→犬吠埼→（銚子市）→②吉田東伍終焉の地碑（海静寺）→③リンドの水準原標（飯沼観音）